

論 文

アメリカ語学研修の新規開拓と可能性 ー カリフォルニア州ベイエリアとネバダ州リノ ー

大湊 佳宏¹・石坂 育子²

¹ 一般教育科ー英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)

² 地球ラボ (Chikyu-Lab., National Institute of Technology, Nagaoka College)

A Development of a New Study Abroad Program in the United States of America
which Focuses on English Language Learning and Its Feasibility
- Bay Area, California, and Reno, Nevada -

Yoshihiro OMINATO¹ and Ikuko ISHIZAKA²

Abstract

Students in National Institute of Technology, Nagaoka College (Nagaoka Kosen) have various different opportunities to experience lives in foreign countries such as Malaysia, Thailand, Mongolia, Mexico and Russia. They do not just experience their foreign cultures, they also have opportunities to work with the local students in order to foster their interpersonal communication skills and problem solving skills. However, none of those programs focuses on their English language competency. In 2018, Nagaoka Kosen received one of the competitive grant called Kosen Initiative 4.0 from Japanese government, and it gave us a chance to create a new program to nurture global-minded engineering students. In addition to the existing study abroad programs we now have in Nagaoka Kosen, we have visited the Bay Area in North California near San Francisco and University of Nevada, Reno to develop a new study abroad program. Our plan and possibility to create a new English-Learning Study Abroad Program are discussed on this paper.

Key Words : *Study Abroad Program, English learning, Silicon Valley, Reno*

1. 背景

平成 30 年度に本校が実施した海外派遣研修は 4 件で、それらは (1) マレーシア：募集定員 15 名程度、(2) タイ：募集定員 15 名程度、(3) モンゴル：募集定員 15 名程度、(4) メキシコ：募集定員 2 名程度であった。それ以外にも、ロシアのロシア極東国立交通大学では、6 名 (専攻科生 4 名、本科生 2 名) の学生が、日本ーロシアー中国の 3 ヶ

国で行う国際的なプロジェクトに 15 日間に渡って参加した。さらに、2014 年度に泰日工業大学に学生を 8 週間派遣したことを皮切りに、今年度はシンガポールの Nanyang Polytechnic においても研究室での受け入れプログラムに 2 名の学生が、さらには台湾では 1 名の学生が国立台北科技大学に、さらに 4 名の学生がフィンランドのトゥルク応用科学大学に派遣されている。学生が専攻する各学科・研究室に配属され 3 カ月から 1 年かけて滞在するような、長

期間滞在をするインターンシップ型のプログラムも始まっている。

しかしながら、本校の海外派遣研修は英語の言語面の強化に特化したプログラムではなく、語学の向上が主な目的にはなっていない。本校での語学研修において、客観的にも英語力の測定をしたのは大湊・他 (2010)¹⁾ のスピーキングに焦点を当てた研究の一度くらいである。本論では、学生の専門の研究分野を気にすることなく、より気軽に参加を希望できる語学の習得を主の目的とした海外派遣研修を検討したい。

平成 29 年度に本校は KOSEN4.0 イニシアティブ「地域産業の国際展開を牽引するヴァンガード・エンジニア育成プログラム」の事業が採択され、「長岡アイデンティティ」を確立すると共に国際的・複眼的視野を醸成し、協定校の学生を「長岡ファン」にすると同時に、地域産業の国際展開への道筋を切り開くヴァンガード・エンジニアを育成するプログラムが始まった。そのプログラムの一環として、海外派遣研修の新規開拓を検討するに至ることとなった。

2. 目的

本稿の目的は、著者らが訪れたカリフォルニア州とネバダ州にある見学企業と教育研究機関を紹介するとともに、本校における新たな海外研修としての実現可能性を探ることである。

英語の語学習得に特化した海外派遣研修の研修先の新規開拓を目的として、英語が母語として使用されている国であるアメリカ合衆国を選択し、海外派遣研修の実施可能性を探ることとなった。2018 年 3 月 21 日～27 日の 7 日間、著者らはアメリカ合衆国に派遣された。鉱学工学や地震工学では世界的に有名な研究室を持つ、University of Nevada, Reno (UNR) を訪問した。また、その付属英語教育機関である Intensive English Language Center (IELC) のディレクターである Ms. Susan Y. Valencia 氏を訪ね、英語研修の可能性についても伺ってきた。また、今回の訪問は、Department of World Languages and Literatures の Ms. Kadowaki 氏の協力によって実現したものである。ここ最近では、Tesla & Panasonic がリチウムイオン電池の生産のために Giga Factory を建設し、多くの技術者が日本からリノに来ている。

また、ネバダ州リノは、カリフォルニア州サンフランシスコからも近い距離（車で 3 時間 30 分ほどの距離）にあり、数多くあるシリコンバレーの企業見学活動も視野に入れての訪問となった。

3. 訪問機関

3. 1 語学研修先

語学の研修先として選択したのは UNR の大学付属英語学校である IELC で、4 年制大学への進学を希望している留学生が主に学ぶ英語学校 (ESL) である。通常の秋学期 (8 月から 12 月)・春学期 (1 月～5 月)、そして夏休みの間のサマー・セッション (6 月～8 月) に通常の授業が開講されており、学生は彼らの英語力に応じて適切なレベルのクラスを履修することができる。この通常のプログラム以外にも Special Program としてその時折に渡米してくる教育機関や留学生のニーズに合わせたプログラムを企画し提供してくれる。以下は、対応してくださった教職員・学生である。

UNR IELC [Intensive English Language Center]

- ・ Ms. Susan Y. Valencia [Director]
- ・ Mr. Mike Murry [Recruiting & Retention Coordinator]

UNR Department of World Languages and Literatures

- ・ Ms. Yoshie Kadowaki [Japanese Program: Lecturer]

UNR Students

- ・ Ms. Miyu Kawada [Vice President of International Club]

UNR OISS [Office of International Students and Scholars]

- ・ Ms. Beth Loureiro [International Recruitment and Admissions]
- ・ Mr. Jeffery Pannell, M.A. [Student Information Manager]

UNR IELC のディレクターの Ms. Valencia とリクルート担当の Mr. Murry とは、実際の授業の内容について議論を交わすことができた。過去にも工学を専攻する大学生を受け入れた経験があり、English for Engineer プログラムの提供は容易であるとの回答を得ることができた。IELC ではリノ南部にある IGT (International game Technology) という企業への企業見学を取り入れたプログラムを実施すること



左 Ms. Kadowaki, 左から 2 番目 Ms. Valencia, 右 : Mr. Murry



左から 2 番目 : Ms. Loureiro, 真中 : Mr. Pannell

が可能であることが分かり、本校の学生の専攻に近い企業の様子をうかがうこともできそうであった。本校のヴァンガード・エンジニア育成プログラムが認定する学科横断型コースの修了要件である PBLII を満たすように、JSCOOP 型の PBL 活動に似た活動の取り入れも、IELC に検討してもらった。授業内でプレゼンテーションを作成・発表し、企業訪問の結果をふまえた振り返りの時間も取れるとのことであった。

UNR 内の International Club の Vice President の Ms.Kawada ともコンタクトをとることができ、UNR の大学生との交流の機会も、当クラブを通じてアレンジができる様子であった。

語学研修が終わった後の可能性についても、当大学の OISS のスタッフである Ms. Loureiro と Mr. Pannell と議論することもできた。Ms. Loureiroからは、工学部の先生方とのコネクションを作る方法を提案してもらい、Mr. Pannell にはその際に学生が必要となる VISA の取得についてのアドバイスをいただいた。本校が行っている、海外の研究機関でのインターンシップの派遣先として UNR がなりうる可

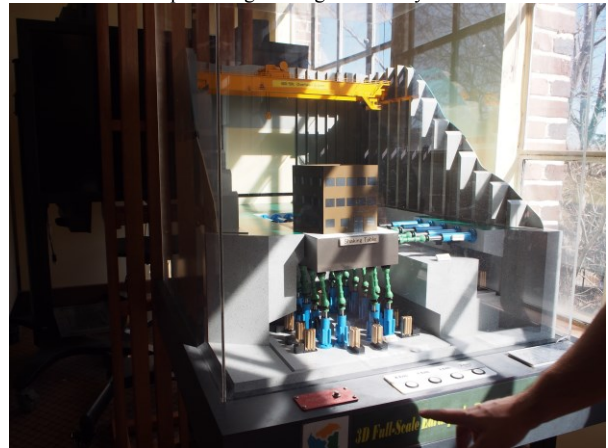
能性を探ったのだが、一番の問題は学生の英語力であるとの指摘が両氏からなされた。IELC に英語研修に訪れる学生の多くが、米国大学への進学を考えているため、授業のスタイルがより大学の授業に合流するための English for Academic Purpose (EAP) スタイルであることが推測される。しかしながら、高専生の進学先として、米国大学への進学も彼らの選択肢になり得ることを著者らは実感した。

3. 2 UNR 工学部

ネバダ大学リノ校 (UNR) は、1874 年にネバダ州リノ市に開校された州立の総合大学で、全米最高レベルである Tier 1 レベルに認定されている大学である。リノ市は大都市ではなく、ミドルサイズ・タウンなので治安は安全で、気候は非常に乾燥しており、1 年のうち 300 日は晴れており、物価も隣のカリフォルニア州と比べると安めである。リノ市は、IBM Smarter Cities grant program に採択され、ネバダ大学リノ校とリノの町が協力してテクノロジー・ナレッジを使用した街の発展モデルを構築している。地震工学の分野では、全米トップレベルにあるシミュレーションラボがあり、Mr. Murry によると、一



Earthquake Engineering Laboratory in UNR



3D Full-Scal Earthquake Engineering Laboratory

回の実験を行う度に\$100,000 がかかるとのことであった。銀の鉱山で有名な街であったため、開学当時からある鉱学工学の分野が存在することも特徴である。工学部の学生に特化した図書館や、学生が自由に使用することのできる様々な器具が自由に使えるラボも存在している。工学部の若い研究者は、ほぼ毎年 NSF CAREER Awards を受賞しているそうである。Mr. Murry にはその他にも、UNR の図書館



DELAMARE Library in UNR



食堂、教室、売店のある Jow Crowley Student Union



Mathewson-IGT Knowledge Center: 図書館

(Knowledge Center), 工学部のキャンパスツアー、鉱学工学の博物館、そして新しく建設されたフィットネスセンター等を案内していただいた。UNR にある工学部 (College of Engineering) にある専攻は以下の通りである。

<工学部: Undergraduate>

化学工学
土木工学*
コンピュータ科学工学
電気工学
物理工学
材料科学工学
機械工学

<理学部>

地質工学
金属工学
鉱学工学

*土木工学には、以下の専門領域が存在する。

1. Earthquake and structural engineering
2. Environmental engineering
3. Geotechnical engineering
4. Pavement engineering
5. Transportation engineering

本稿の語学研修先の新規開拓とは関係がないのだが、将来的に本校の学生を UNR の工学部の研究室に一定期間滞在し研究活動をさせることが出来るのかの可能性について、UNR の Ms. Loureiro は前向きに検討できる回答している。もちろん学生の英語力の問題や、Mr. Pannell の専門領域である VISA の問題も残るわけだが、世界レベルで先進的な施設が存在する UNR は、本校の学生や教員によっても刺激的な大学・研修先となることは間違いないと思われる。

3. 3 企業訪問

シリコンバレーには多くの有名企業が集まっており、高専生が興味を示すであろう企業が集合している。語学研修で培った英語力の総まとめとして、それらの企業を訪れることはとても意味のあることであると考えた。ただし、企業の中への立ち入りを許可してもらえる企業は限られており、実際に著者が訪れ建物の中に入ることができたのは、カリフォルニア州サンタクララに本社を置く半導体メーカー Intel に併設されている Intel Museum と、著者の個人



Amazon Lab 126 in Sunnyvale



在サンフランシスコ日本総領事館 左：Ms. Tamagawa,
左から2番目：Mr. O'Donnel

的なつながりのある人物が働く Amazon のみであった。後者の社内への立ち入りは、知り合いが働いていることが条件で、多くの制約のなかで見学することを許可されたもので、学生の見学には不向きであった。Amazon Lab 126 はカリフォルニア州サンニェール (Sunnyvale) にあり、周辺にある広大な土地には、未だ建設中の建物が多く存在し、近い未来にはまた数多くの企業が進出してくるものと思わされた。余談だが、夕方5時になるとこの地域周辺は大渋滞が起こる。多くの労働者 (研究者) が一斉に帰宅するからである。日本のように、残業のために会社に残るといのは少ないようであった。その他にも、建物の中には入ることができなかったが、数多くの企業を見て回ることも出来た。これらも後章において紹介することとする。

学生が米国滞在時に訪問することができる企業をさらに紹介してもらうために、著者らは在サンフランシスコ日本総領事館の Mr. Wiesner-Hanks とアポイントメントをとった。これは、UNR の外国語学部の Ms. Kadowaki の紹介により実現することがで

きた。訪問時に総領事館でお話をする事ができたのは、以下の方々である。

Consulate General of Japan in San Francisco [在サンフランシスコ日本総領事館]

- Mr. Kai Wiesner-Hanks [JET Program Coordinator]
- Ms. Maiko Tamagawa [Advisor for Educational Affairs]
- Mr. Kevin O'Donnel [Political Affairs]

現地の会社内に入るには、やはり会社の内部の方とのコネクションが必要だということで、Mr. Wiesner-Hanks が、大学の卒業生を英語の教師として日本に送る JET Program を担当していることから、JET プログラムで日本を経験し、その後アメリカで会社を経営したり役員を務めている方を紹介してもらえ運びとなった。大企業ではないが、高専生が興味のあるような企業を紹介してもらえとのことだった。(後日談ではあるが、この方法では紹介ができないとの連絡が届いた。)

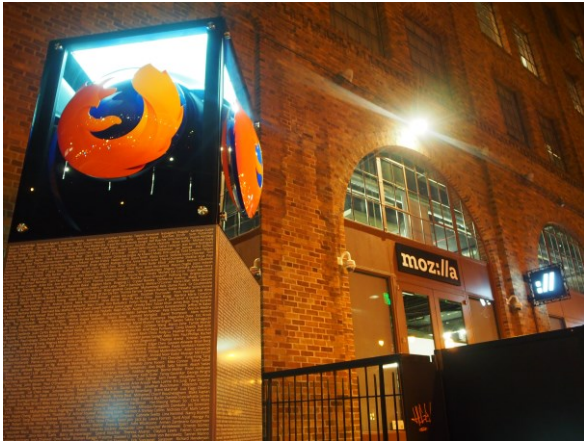
企業訪問の他にも、ベイエリアでのホームステイの可能性を総領事館で伺った。長岡市とサンフランシスコが姉妹都市ではないことから、直接紹介できないとの回答であったが、過去に三重県の団体を受け入れた際に行った方法で、ホームステイ先の探し方を紹介していただいた。それは、民間の企業が運営するウェブサイトで、homestay.com というサイトである。比較的短期間の滞在であれば簡単に探すことができ、その三重県の団体もうまくホームステイをすることができたとのことであった。しかしながら、サンフランシスコ近郊は、アパートに暮らす人が多く、いわゆるホームステイをするのであれば、オークランドやサンノゼ地域に移動することになり、少し広がったエリアでの滞在となることが明らかになった。これらのことから、ベイエリアで複数人数でのホームステイ先を探すことやそれをマネジメントすることは、困難であることが明らかになった。

3. 4 ベイエリアにある企業

今回の視察でまず初めに訪れたのは、全米でもトップレベルの名門大学であるスタンフォード大学であった。学生や企業に勤める人たちが集まり、イノベーションにつながる新しいアイデアが生まれる場所として、d.school という場所が存在すると聞いていたからである。d.school は大学の学部ではなく、スタンフォード大学の中で学生たちがアイデアを議



Intel Museum in Santa Clara



Firefox in San Francisco



Hoover Tower at Stanford University



Apple Park Visitor Center in Cupertino

論していた場所がきっかけで始まり、そこで多くのプロダクトを生み出し続けているために、大学側からも設備を支援し始めたことから出来上がっていったらしい。運が悪かったことに、スタンフォード大学を訪問できた日程が日曜日だったため、外からの外観だけを見るだけとなってしまった。

その他に、スタンフォード大学があるパロアルト（Palo Alto）近郊で訪れることが出来たのは、グーグルプレックス（Googleplex）と呼ばれる、Googleの本社であった。Google Merchandise Storeなどには自由に入ることが出来るが、社内の見学に関しては社員に知り合いがいらないことには難しく、内部は基本撮影禁止の様子であった。中庭には我々以外の観光者も散見できた。

その後、著者の個人的なつてをたどり、アニメのVR化を手掛けている Make Fire という会社に勤める Josh 氏と面会をすることが出来た。アニメ好きの本校の学生は興味を持ちそうだと思います、海外研修が実現した際には、企業内の見学ができるよう承諾を得ることができた。その他には、やはり社内知り合いがいらないと見学ができない Amazon Lab 126 の内部を、著者のコネクションをたどり行うことができた。社内は国際色が豊かで、ミーティングを行う施設のユニークさや、食堂の間取りなど、見学しても差し障りの無い施設のみの見学だったが、まだまだ成長し続ける Amazon 社の工夫を垣間見ることができた。最後に Amazon 社の Leadership Policy についての説明をいたしたが、その内容は customer obsession であることが強調されて説明された。

その他にも、サンフランシスコ（San Francisco）からサンノゼ（San Jose）近郊では、数多くの有名企業を目にすることができた。Facebook 本社や、Firefox, First Retailing, Honda Innovations, Symantec, Marvel, Linked In, HP, Tesla 等々高速道路を走れば、様々な企業の看板が目に入ってくる。それらの数多くある企業の中で、サンタクララ（Santa Clara）にある、Intel 本社を訪ねた。理由は、無料で訪れることのできる Intel Museum があると聞いたからであった。きれいな本社建物の中にある博物館には、Intel の半導体チップがどのように作られたのかの歴史を説明するセクションや、Intel 創設者の 1 人の Mr. Robert Noyse の展示などもあった。Intel のロゴの入ったお土産物を購入できるショップも併設されており、シリコンバレーの観光スポットにもなっている様子であった。入場も無料であることから、訪問先の候補としては手軽であると思えた。入場無料である施設としては、2017 年 11 月にクパティエーノ

(Cupertino) の本社ビルの隣にオープンした、Apple Park Visitor Center がある。予約なしに、気軽に訪れることのできる施設の 1 つである。

4. 問題点と今後の展開

4. 1 問題点

本訪問を終え、挙げられる最大の問題点は、新しく提案するアメリカ語学研修の参加費用である。飛行機代はシーズンによって差異が生じるものの、本校の長期休業中である夏休み（8月・9月）や春休み（3月）であると、航空運賃は劇的に飛躍する。海外派遣研修の募集の時期にもよるが、3カ月前にチケットの予約ができたと仮定しても、東京－サンフランシスコ間は、12～18万円くらいが相場であろう。さらに、IELC からプログラムの見積もりも届いている。8月の英語研修を想定して、2週間の英語研修（English for Engineers）と2週間の宿泊費（寮：朝食・夕食付）、アクティビティー代等を合わせて2,000USドルで、1USドルを約110円で換算して、約220,000円となる。さらには、日本とアメリカ国内の移動料金、海外旅行保険料、その他諸経費を合わせると、合計40万円を超えることとなる。アジア諸国を中心に行っている本校の海外派遣研修の参加費用と比べると、相当高額な費用となる。後援会などの補助を充当したとしても、費用が30万円を超える海外派遣研修は本校には他には存在せず、学生から強く敬遠される傾向にある。そこに拍車をかけるように、IELCからは、この料金で行うには最低15名の参加者を集めなければ施行できないと言われており、実現の可能性が遠のいた。

2つ目の問題は、訪問期間（時期）の調整であった。本校としては、長期休業中（夏季休業・春季休業中）である8月・9月または3月を希望したが、IELC側としてはUNRが夏休み期間中の6月、7月、8月を提案してきた。これはUNRが夏季休業中に、UNRが持つ寮を提供できるからである。寮を利用できれば、キャンパス内での食事プランも利用することができ、遠く離れたスーパーマーケットまで食料を買いに行く手間もなく、近隣のホテルに連泊をするよりも比較的安価に滞在をすることが出来る。さらにUNR側としては、正規の学生が夏季休業でがら空きになる寮を稼働できる利点がある。訪問期間としては、両校に共通する8月の訪問がベストのように感じるが、アメリカの学校は秋学期（UNRでは8月下旬）に新学期が再開するために、

2～3週間のプログラムを組むことを仮定すると、最低でも8月上旬から8月の中旬に渡米することが必要となる。すると、本校の学年歴と照らし合わせると、前期期末試験とぎりぎり重なるか、最低でも試験返却を行う発展授業期間には渡米をする必要がある。するとおのずと2週間の期間に限定をした海外派遣研修が我々の選択肢となる。しかしながら、英語教育を専門とする教員としては、語学習得を目的とする研修を行うのであれば、最低でも4週間は必要であると感じている。IELCの教員であるMs. Valenciaも同様の意見を持っていた。

3つ目の問題は、治安である。著者らが滞在したリノやベイエリアは比較的安全な地域ではあるが、ベイエリアのホテルが高額だったために、少し郊外に離れたリッチモンドにホテルを取り滞在したが、米国の生活に慣れている著者らではあったが、治安の悪さを感じた。滞在先選びをより慎重に行うことで、参加学生の安全を確保していく必要があると感じさせられた。リノに関しては、治安は問題がないように感じられた。

4つ目の問題は、アメリカ研修の際、単なる語学研修でも週に18時間以上就学する場合はビザ（F-1ビザ）が必要らしく、他国の訪問と比較しても手間がかかりそうである。ただこれは学生ビザを申請すれば済むことであり、OISSのMr. Pannellも前向きにサポートしてくれるとのことであったので、それほど大きな問題ではなさそうである。

4. 2 今後の展開と解決方法

帰国後に、長岡市内の企業を対象にシリコンバレーの企業を見学できる2週間の英語研修を売り込んでみてはどうかとの提案がなされた。本校が語学研修を企画・運営を行い、企業内の社員研修の一環として、一定の金額を社員の研修料として支払っていただき、幾分かの金額を本校学生の旅費に当てるという案である。過去に例を見ない試みではあるが、魅力のある企画を提供できれば、集客が見込める計画であると思われる。実際に実施するとなると、本校が売り上げを上げることが出来るのか、その料金はどのような処理を経て学生の旅費と出来るかなど、テクニカルな問題が出てくることが予想されるが、挑戦してみる価値があるように感じられる。

本校の海外派遣研修は毎年募集をかけているが、2年に1度や3年に1度の募集に変更することも検討できる。また、Global PBL IIに沿うプログラムに仕上げる必要が本当にあるのかも検討事項である。そもそも海外派遣研修は、Problem Solving Skillの向

上が目的なのか、それとも語学力の向上が目的なのかを今一度検討する必要がある。もちろん、課題を解決する過程で使用する言語を習得する Task-Base スタイルの言語学習の手法 (Ellis, 2003²⁾, Nunan, 2004³⁾) も存在するが、計画する海外研修の目的を今一度クリアにすることも、より効果的な研修プログラムを作るうえでは、必要なのではないだろうか。

5. まとめと今後の予定

新規海外派遣研修として、以下のようなプログラムを提案することができる。

目的：

1. 本校に在籍する学生の英語力をより高度な英語へブラッシュアップする
2. 問題可決 (PBL) 型の課題解決活動を通し、学生の汎用性能力を養成する

訪問国：アメリカ合衆国

研修先：Intensive English Language Center (IELC),
University of Nevada, Reno (UNR)

実習企業先：IGT (International Game Technology)
(リノ, NV)

見学企業：(未定)

研修日程：8月上旬～8月中旬(例：2019年8月4日(日)～18日(日))

参加費：40万円程度(各種補助金は含まない)

参加資格：

1. 18才以上である(UNR側からの条件で、それより若い場合はpartonを有料でつける必要がある)
2. 既に一定の英語力を保持している(最低でもLow Intermediate level)
3. 特に英語のスピーキングやライティング力の向上を目指している学生である
4. 事前・事後研修に必ず参加できる学生である
5. 参加事前・事後にTOEIC Speakingテストなどの実力の伸長を測定する
6. ヴァンガード・エンジニアコースの履修生であることが望ましい
7. 既に海外派遣研修など、海外経験が既にある学生が望ましい

※最低遂行人数：15名(15名に満たない場合は中止とする)

研修内容

- ・参加者を対象に事前(英語実習・PBL準備)・事後(振り返り、報告プレゼン)学習を行う
 - ・IELCでは、English for Engineer Programが準備され、参加者に提供される。授業は、高専生のみのもスモールクラスでReading & Writingクラス、Listening & Speakingクラス、English For Engineerクラス、プレゼン準備クラス等が開講される
- ※授業スケジュールは未定

IELCは、授業の他に以下のようなアクティビティを準備できるとの提示があった。

- ・American Cultural and Social Activities
 - Sample Museums and Field Trips:
 - Planetarium
 - Nevada Museum of Natural History (at UNR)
 - W.M. Keck Earth Science & Mineral Engineering Museum (at UNR)
 - Historic Virginia City Trip
 - Discovery Museum
 - Donner Pass Museum
 - Lake Tahoe
- ・Sample Cultural Activities
 - Participate in Soccer, Volleyball, or Basketball games with other students
 - Outdoor Movie Nights
 - S'mores and Campfire Night
 - Lake Tahoe Beach Party
 - Wild Island Water Park
 - Aces Baseball Game
 - Bowling
 - Reno ArTown activities
 - Fourth of July Firework Show
 - Final Reception - Students will receive a certificate of completion and celebrate their accomplishment with their instructors and classmates.

教室にとどまり、多くの知識や技術を学ぶことも大切だが、英語が母国語として話されている国で英語研修をする醍醐味は、やはり外にでて、現地の人と触れ合えることではないだろうか。買い物や街でのやりとり一つをとっても、常に英語が使われているアメリカで語学研修を行うことには多くの意味があるように感じた。参加費用が高額になることが容易に予想されるが、たくさんのトップ企業がひし

めくカリフォルニア州やネバダ州において行う語学研修は、未来のエンジニアが語学研修を行う場所としては最高である。希望学生数の数を集めることが出来るか不安は残るが、隔年募集などの工夫も必要である。また、逆説的には、このようなハードルの高い研修ではなく、より気軽に（海外の文化を経験してみたい等のより一般的な動機で）参加できる語学研修もあってもよいのではないだろうか。様々な可能性がある中で、海外派遣研修がねらう目的、学生を教育する目的、何が成功で何が失敗なのかをより明らかにし、振り返り、本当の意味でより良いプログラムの作成が求められていると感じている。その1つの目的として、語学力の育成に焦点を当てたプログラムを作成し運営していくことに意味があると信じたい。

謝辞：米国海外派遣研修新規開拓事業に関わってくださった多くの方々に、この場をお借りして深く感

謝申し上げたい。さらに、本事業はKOSEN 4.0イニシアチブ「地域産業の国際展開を牽引するヴァンガード・エンジニア育成プログラム」から予算を産出頂き実現しました。

参考文献

- 1) 大湊佳宏・占部昌蔵・田中真由美：「海外派遣研修（オーストラリア）に参加した学生の英語スピーチ分析」，長岡工業高等専門学校研究紀要，第46巻，pp.1-6, 2010.
- 2) Rod Ellis: Task-Based Language Learning and teaching, Oxford University Press, Oxford, 2003.
- 3) David Nunan: Task-Based Language Teaching, Cambridge University Press, Cambridge, 2004.

(2018.10.3 受付)